

名古屋城本丸御殿の復元にも 欠かせない^{かざり}鋳金物

愛知万博の時、金の鯨を修理

名古屋市は名古屋城本丸御殿の復元を進めています。城の御殿や神社仏閣等を建築するのは宮大工ですが、柱などに取り付けられた釘隠しや長押部分などの^{かざり}鋳金物を復元するのは鋳金物職人です。これら鋳金物は銅や真鍮を削り、打ち、彫るなどの手作業で一つひとつつくられます。

2005年に開かれた愛知万博にあわせて新世紀・名古屋城博がおこなわれたとき、名古屋のシンボルとされている金の鯨が天守閣から降ろされ展示されました。長年、風雨にさらされていたため、汚れと傷みがありました。それをきれいに修理して再び金色の輝きを取り戻させたのが、名古屋神仏鋳金物工業協同組合です。

名古屋神仏鋳金物工業協同組合は仏壇八職のうち、内金物といわれる部分や仏具、神具、寺物、神輿や山車などの装飾用金具などもつくります。

名古屋での鋳金物の起源は江戸の初期

名古屋の鋳金物の歴史は古く、江戸時代には刀の



つば ^{かんざし} 鑢、簪、箆筒や長持ちの鋳金物をつくっている人によって始まったといわれています。それが様々な装飾用の金具をつくるようになってきたのです。

名古屋城本丸御殿の復元で使われる、長押、釘隠しなどに、こうした鋳金物が使われています。そこで名古屋神仏鋳金物工業協同組合は他の鋳金物業者と協力し、鋳金物の復元に取り組んでいます。名古屋のシンボルとなるものをつくるのは、名古屋という地で長年にわたり培ってきた伝統の技を形として後世に残していこうという強い使命感すら感じられます。

組合員の数には昭和50年代の30数社から10社へと年々減少しています。しかし技術が衰えることはありません。刀の鑢や簪の技術が仏壇や神具の装飾金物に受け継がれたように、優れた技術によって、これからも時代にあったすばらしいものが創り出されるかもしれません。



DATA ■名古屋神佛鋳金物工業協同組合
所在地：中区門前町 5-18 (有) 日野屋内

- ・明治 37 年頃組合を結成
- ・戦争の激化により昭和 10 年代はほぼ解散状態
- ・戦後、愛知神佛鋳金物工業協同組合を結成
- ・昭和 54 年：名古屋神佛鋳金物工業協同組合に名称変更